

## もつらむつの労働運動は可能か？

—書評「反抗する一般組合員 長い七〇年代の労働者戦闘性と下からの反乱」（第一部）

マット・ノイズ 明治大学経営学部特任講師

翻訳 山崎精一 明治大学労働教育メディア研究センター研究員

### 目次

- 第一部 次の大高揚と最後の大高揚（今号掲載）
- 第二部 突然の厳しい引き締め（以下順次掲載）
- 第三部 これが一般組合員の反抗だ

## 第一部 次の大高揚と最後の大高揚

「大衆運動が興るためには多くの民衆が時間とエネルギーを犠牲にし、運動に希望を託し、恐怖に打ち克ち、危険を冒す決意をしていなければならぬ。しかし、民衆が決意するには課題が深く共有化されていなければならない。社会運動はその他の政治とは異なり、根源的に民主的なものであり、何千人の人々が行動しない限り何も起らない」（ダン・クローソン『次の大高揚』Clawson2003）。

本稿はアメリカの一九七〇年代の労働運動の高揚を担った一般組合員の反抗とそのなかでの左翼の役割を評価しようとする書評である。書評の対象は「Rebel Rank and File: Labor Militancy and Revolt from Below in the Long 1970s」Aaron Brenner, Robert Brenner, and Cal Winslow, eds. New York: Verso, 2010. 393 pages である。今号では同書の紹介と戦後アメリカ労働運動の大まな波を概観する。

第二部では七〇年代の政治経済分析、第三部では一般組合員の反抗の個別事例を取り上げる。執筆者のマット・ノイズは八〇年代末からアメリカで一般組合員の労働運動に参加し、現在も労働組合民主主義協会などの活動に携わる日本在住の労働運動研究者・教育者である。

動の次の大高揚がついにやつてきたのかかもしれないのだから。労働者の戦闘性の大高揚が前回終了してからこの三〇年間、労働組合にとってわずかな例外を除いて、衰退と敗北という苦難の時代だった。私の友人の地下鉄運転手で左派労働活動家のスティーブ・ダウンズ（Steve Downs）は不都合な真実から決して逃げない男だ。彼が、米国の「労働運動」について語るのには間違いだと語っているが、そのとおりである。そう呼ぶのが思いやりから、あるいは怠惰から、あるいは単に困惑からであれ、間違いであり、運動など存在しないと、彼は言っているのである。

職場や地域で労働者の組織を推進し支援する労働組合、労働者センター、一般組合員の改革グループ、労働者と地域組織の共闘などの取組みは存在する。さらに労働者間のインターネットを通じた通信も広がっている（Noyes 2002 参照）。これらの取組みを維持し、支え、拡大しようと努力している活動家たちは貴重な存在だが、その大部分は組織を維持し、運動や取組みを継続し、行動を組織するのに追われており、NGOの場合は活動を維持するための資金獲得に追われている。さらに重要なのは、労働の密度・質や協約改定をめぐる闘いもあり、時には戦闘的で劇的な行動もしなければならない。また指導部に挑戦する一般組合員の反対組織もあり、役員選挙への立候補もある。ダン・クローソンも述べているように、もし次の大高揚があ

るとすれば、労働者や活動家たちが過去の多くの欠点を克服するような新しい運動の基盤を準備してきたのである。しかし、準備は行なわれているにせよ、現状では反転攻勢はまだ始まつてはいない。

私のように最後の大高揚の後に活動を始めた活動家の世代にとって大高揚への渴望は強いが、一世代前の六〇年代七〇年代のラディカルな「新左翼」経験者はさらに強く待ち望んでいる。私は一九八九年にストライキの小さい波が起きた時に労働運動に関わり始めたが、その当時の韓国や南アフリカのような労働者運動を経験したいと望んでいた。<sup>①</sup>

ステイアーズ・ダウニズのような活動家や『反抗する一般組合員』の編集者や執筆者の大部分は激動する労働者運動に入っていく、労働者運動が引き続き新しい段階まで発展し、新しいアメリカ革命にまで到達することを望んでいた。運動が分裂し後退しても、最後の大高揚の時代の活動家たちは踏みとどまり、労働組合を変革しようと決意していた。どんな可能性を労働組合が秘めているか体験しているからであった。しかし、後退は継続し、深みに引きずりこまれていった。したがって、労働運動の中の多くの人がマディソンでの出来事やウォール街占拠運動のエネルギーと力に強く魅せられているのは不思議ではない。占拠に加わっている若い活動家にとつては今回が最初の行動であり、新たな始まりである。ただ、彼らはこれほどの期待を

集める対象となつていて戸惑っているかもしれない。ウォール街占拠運動は「現にあるもの」に過ぎず、第一歩であり、守り發展させるべき空間であり、その斬新さと公開性はこの運動のエースの一部なのである。

その「現にあるもの」とは、街頭に繰り出した何千人の人々、国内外への急速な拡大、警察の野蛮な襲撃にも耐え表現の自由行使して繰り返し結集する抗議者たちの能力、全員集会の参加型民主主義、反省と参加の余地を保障するために表立った指導者を認めたり要求をまとめるなどを拒否していること、労働組合や地域組織からの支持、他の人のために具体的な闘いに行動力を割いていること<sup>②</sup>、であり、それは実際に刺激的で感動的である。

労働組合は早くからウォール街占拠運動を支

持してきた。ニューヨーク市の都市交通労組、全米通信労組、チームスターーズ労組のサザビーズ競売場を組織しているローカルユニオンなどが活発である。労働組合が支持したことにより、労働運動その他の既成の運動組織がウォール街占拠運動とどういう関係を持つか問われることになった。依然として民主党を全面的に支持している労働組合は、この生まれたばかりの運動を取り込み、オバマ支持まで持つていくのは無理として、せめて共和党に反対するところまで

決めているので、労働組合が取り込むことは難しいと思われる。しかし、ウォール街占拠運動と同じ年に、ウィスコンシン州で公務員労働組合に対する大きな支援運動が起こり、州都が占

拠され、組合攻撃の条例が可決されるのを防ごうとして民主党州議会議員たちが州外に逃げた

りしたことは、労働組合とウォール街占拠運動との相互の影響が強まる可能性があることを示している。

私は、労働者運動の再生をもたらす新たな大高揚を期待する誘惑に駆られそうになる。しかし、甚大な困難性を想起することが必要であり、

生み出すことになるのか、いまのところわからぬ。

労働組合の幹部がウォール街占拠運動を取り込もうとする、あるいは少なくともその理念を

取り込もうとする微候が現れたのは一月中旬に全米サービス従業員労組（SEIU）の

メリ・ケイ・ヘンリー（Mary Kay Henry）委員長がオバマ大統領の支持を労働組合として最初に発表したことだった。さらに「われわれは九九%」という主張にもとづいて首都ワシントンで集会を開催するとも発表した。ジャーナリストのグレン・グリーンワルド（Glen Greenwald）によれば、労働組合がその伝統的な政治活動のためにウォール街占拠運動を取り込もうとした最初の事例である（Greenwald 2011 参照<sup>③</sup>）。

ウォール街占拠運動は取り込まれまいと堅く決めているので、労働組合が取り込むことは難しいと思われる。しかし、ウォール街占拠運動と同じ年に、ウィスコンシン州で公務員労働組合に対する大きな支援運動が起こり、州都が占拠され、組合攻撃の条例が可決されるのを防ごうとして民主党州議会議員たちが州外に逃げたりしたことは、労働組合とウォール街占拠運動との相互の影響が強まる可能性があることを示している。

私は、労働者運動の再生をもたらす新たな大高揚を期待する誘惑に駆られそうになる。しかし、甚大な困難性を想起することが必要であり、

どうしようもない現実を覆い隠す言辞に惑わされて偽りの希望を持つことを慎むことが大切である。「労働陣営」はひどい現状にある。大多数の労働者、九四%もの労働者は労働組合に組織されておらず、労働者センターや日雇い労働者のネットワークなどの重要な層はまだきわめて少数である。二〇〇六年のメーデーでの移民労働者の驚異的な大高揚は本質的には政治的な条件の大きな譲歩と引き換えにすることを提案していたのだった。

ウォール街占拠運動と労働者運動の関係について一番洞察力のある問を発したのは労働ジャーナリストのアリ・ポール (Ali Paul) である。「ウォール街占拠運動の中で労働組合が果たす役割を考える一番良い方法はウォール街占拠運動が労働運動に何を提供できるか問うことである。ウォール街占拠運動は米国の残り少ない労働組合に刺激を与え、個別の経営者にわずかばかりの賃金引き上げを要求することから抜け出し、一つの産業で労働基準を打ちたてるだけでなく、急進派が夢見たように新しい経済秩序を生み出すために労働者階級を組織することをめざし始めるかも知れな」 (Paul 2011 参照)。

衰退していくているのは、経済的な利害だけを追つて いるからだけではなく、また個別の経営者に 要求して、一つの産業の水準を設定するため に労働者を組織しているからだけでもな い。問題はもつと深刻である。ほとんどの労働組合は日々の生活利害を守り、既存の水準を維持する能力さえ欠如しているのである。<sup>(6)</sup>組合指導者や大部分の労働者が新しい経済秩序のビジョンを持つていないとポールが言うのは正しげに、より意欲的な目標よりもつと必要な物がある。もっと重要なものでポールが見落としているもの、それはウォール街占拠運動の特色であり、労働組合がもつとも必要としているもので、ウォール街占拠運動が労働組合に提供できるもの、つまり占拠、参加型民主主義と政治的独立性であり、マリナ・シトリン (Marina Sitrin) が「水平主義」("horizontalism") と呼んでいるものである (Sitrin 2006 参照)。

しかし、ウォール街占拠運動が今日の米国労働組合に何を提供しているかという問いを理解するためにはその名にふさわしい労働運動が存在していた時代、「最後の大高揚」と一般組合員の反抗の「長い七〇年代」を振り返つて見なければならぬ。

国中を吹き荒れ、その結果ラディカルな若い活動家の一世代が労働者階級に引きつけられ、社会主義革命の夢を現実の労働者階級の闘争の中に根付かせようと試みた。これらの急進派の活動家たちは「下からの」組織化という政治的な志向を抱いており、また、ちょうど良い時代に遭遇していた。つまり、入つていった職場では三〇年代四〇年代以来見られなかつたような一般組合員の高い水準の戦闘性が發揮され、社会は自由を求める鬪いと反戦運動で沸き返つていたのだ。

労働組合に何を提供しているかという問い合わせを理解するためにはその名にふさわしい労働運動が存在していた時代、「最後の大高揚」と一般組合員の反抗の「長い七〇年代」を振り返つて見なければならない。

最後の大高揚

一九六〇年代中頃から一九八一年にかけてストライキなど労働者の戦闘性の様々な形態が米

献と下からの反乱の最終的な敗北についての評価ともなっている。

共編者のアーロン・ブレナー (Aaron Brenner)

はこの本の中心的な主張と基本的な視点をこう定めている。「六〇年代初めから一九八一年の間、米国労働者はきわめて高い職場戦闘性を發揮した。そのもとも明らかな現われは米国史上最大のストライキの波だった。さらに、一般組合員による労働協約批准拒否、集團的な不服従、サボタージュ、組織的なストライク、山猫ストライキが労働者の戦闘的な気分を証明していた」(xii頁)。「この戦闘性の広がりは六〇年代と七〇年代の経済的混乱に根がある。経済的困難が経営側の攻撃を生み、企業は労働者の賃金、付加給付、労働条件、職場支配を攻撃することにより利潤を維持回復しようとした。こ

の攻勢が労働者の反発に火をつけ、労働者は一層怒り、戦闘的になつていった。二〇年間にわたる繁栄により増大した自信と期待により労働者は燃えやすくなつていた」(二五一頁)。

この時代には、学生運動、反戦運動、公民権運動、黒人の運動、女性運動など、巨大な社会運動が戦闘性を強めていき、すでに職場で燃えていた「炎」に「火種」を加えることになつた。その結果、「生産点」での階級闘争が革命への鍵であると考える職場急進派と学生急進派の一世代を生み出すことになつた。ブレナーによれば、大高揚をもたらした最後の要因は「弱い組合指導部」の存在だった。組合指導部はまた

同時に独裁的であり、時には危険なほど腐敗していた。経営者により行動に駆り立てられ、しかし、組合指導部により妨害された労働者たちは反抗した。「その結果はわが国で最大最長のストライキの波だけではなかつた。職場での経営者に対する集団行動を組織し、組合指導部に

対して政治的に挑戦する一般組合員の組織が広がつていつたのである」(二五一頁)。

大高揚が続いている間は効果的であった。多くの産業において一般組合員の反抗は「賃金や付加給付、先任権や労働者の尊厳のような職場の重要な課題を維持改善した」。「戦闘性は公務員組合の大規模な組織化に結びつき」カリフォルニア州農業労働法や塵肺症関連法令などの重要な政治的勝利を勝ち取つた、とブレナーは述べている(xii頁)。

しかし、一九八一年までには大高揚は終わつていて了。戦闘性の喪失には多くの要因があつたが、「失業の増加、労働組合に対する経営者の敵意の増大、社会運動の分裂、単純なる疲労」(二五一頁)などが挙げられる。他には独自の政治戦略を組合指導部が持つていなかつた点、組合指導部と一般組合員の組織の双方とも人種差別やジエンダー差別と「正面から対決」できなかつた点も挙げられる。最後に、既存の労働組合の管轄の枠内で組織しようとして、職場を越えて地域団体や社会運動と十分に強いつながりを築くことに失敗したことにより、一般組合員の組織は「ビジネス・ユニオニズムが定めた境

界」(xvi頁)を越えることができなかつた。

この『反抗する一般組合員』の狙いはこのよくな経緯を肉付けし、その叙述をこの時代の経済・政治の歴史と一般組合員の個々の運動の歴史に照らして吟味することである。非常に多様でそれぞれの固有の歴史を持つた闘いからなる運動の物語を語り、運動の興廢を跡付け、そして運動の歴史上の教訓と活動家にとつての教訓を導き出すことは至難の課題であるが、本著はその大部分を達成している。やり残した点はまさにわれわれが解決すべき課題である。戦闘性の問題、民主主義の問題と政治の問題である。

## 本書の内容

本書は二つの大きな部分より構成されている。最初の四つの章は「下からの反乱」を概観し、その経済的政治的背景と大高揚を生み出し形作つた要因など「大きな絵」を分析し、次の八つの章は様々な産業での個別の労働争議の事例研究を提供している。最後に運動の成果、欠点と現在に与える影響を評価する評論で結んでいる。高名な労働写真家アール・ドッター (Earl Dotter) の写真がこの時代の一般組合員の反抗の精神を伝えてくれている。本書は豊かな論文の集積であり注意深く研究する価値がある。その理由は単にこれまで十分に語られてこなかつた運動を「再生」し、この時代の労働・社会史のもう一つの分析を提供しているからだけでは

なく、その「一般組合員的」とでも呼ぶべき分析の視点が労働者運動にとって価値があり、活動家の領域の外ではまだ知られていないからである。

## 【長い七〇年代】

『反抗する一般組合員』の編者たちはジョバニ・アリギ (Giovanni Arrighi) の『長い二〇世紀』から借用した「長い一〇年」という概念を使つて一五年ほど続き七〇年代に山場を迎える期間の運動の特徴をとらえようとしている。その始まりは「六〇年代初め」とかなりあいまいである。執筆者たちは労働者の闘いの大高揚の起源を探り、その主な展開を追つてあるが、その時期を定義づける多くの特徴、ストライキの波、一般組合員の不満の増大、経営側の攻撃、組合指導部への挑戦、他の社会運動とのつながり、は五〇年代さらには四〇年代にまで遡ることができる。しかし、一般組合員の反抗は七〇年代に入つて顕著となる。

長い七〇年代の終わりははつきりしている。ロナルド・レーガン大統領が航空管制官労組 (PATCO) のストライキを破壊した一九八一年である。このストライキとその弾圧の際に組合指導部が反撃することができなかつたことがすべての産業の労働者に波及し今日まで続く大衰退の開始を告げることになった。組合組織率などの数字は七〇年代初めから低落し始めていたにせよ、ストライキ統計、組合員数、所得

格差など多くの統計数字のはつきりとした転換点は一九八一年だった。(一、二年の出入りはあるにせよ)もちろん、一九八一年の後にも重要なストライキや争議はあつたし、八〇年代に入つても一般組合員の組織は多く生き残つたが、労働者の戦闘性が突然、劇的に低下したことは否定のしようがない。

## 一般組合員の一〇年

本書の共編者であるカル・ウインスロー (Cal Winslow) は著述家でメンドチノ研究所 (Mendocino Institute) の所長であり学生運動・

反戦運動の経験者であるが、その「下からの反抗一九六五年から一九八一年」と題する概括のなかで「下からの反乱」について説明している。

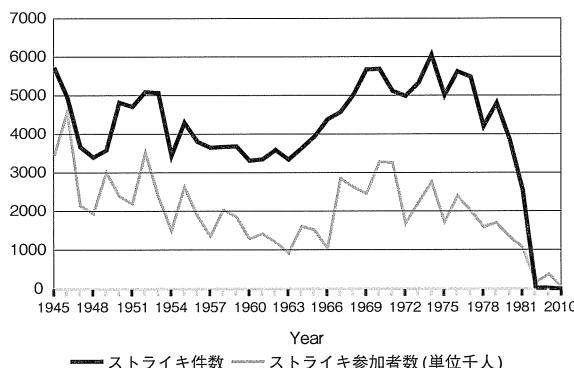
「長い七〇年代は何よりもストライキの波により特徴づけられる」(七頁)。二〇一二年の現在から見ればストライキの波は遠い存在に思えるが、一九八一年まで戦後期全体を通じてストライキは当たり前のようになっていた(図表1)。長い七〇年代のストライキの波は実は第

二次大戦後の二つの大きなストライキの波の内一つだった。最初の波は戦後直後から一九六三年ごろまで続いた。第二の波は一九六三年から一九八〇年にかけて続き、一九七四年には三〇〇万人以上が参加する六〇〇〇を超えるストライキが行なわれ、史上最高を記録した。しかし、特徴的なのはその数の多さではなく、多くのストライキが公式に認められた「上から」の

組織された行動ではなく、「下から」の一般組合員の活動の結果だったという事実である。当時の労働活動家と研究者の観察者たちは労働者の間に「新しい気分」、自信と「自らの力」の自覚が生まれていると指摘している(九頁に引用されているジャック・バーバッシュ (Jack Barbash) の言葉)。この「自らの力」の自覚は山猫ストライキその他の非公認の争議行為の頻発にとくによく現れていた。「労働協約批准拒否、集団的不服従、サボタージュ、組織されたストライク、山猫ストライキは一般的だつた」(裏表紙)。

山猫ストライキの数は急騰し、六〇年代初めから七〇年代中頃にかけて倍増し、ストライキ四件に一件は山猫だった。山猫ストライキは典型的には労働協約の有効期間中に行なわれ、非常に危険か不公正な状態に対する反発であり、一般組合員の不満のもつとも直接的な表現である。「炭鉱では一九七四年から七五年の間に九〇〇〇件のストライキがあり、その九九%が山猫だった」(二二頁)。この数字だけでは動乱の激しさが伝わらない。一九六五年のトラック運転手の山猫ストライキはフィラデルフィア市を封鎖してしまったが、「トラック運転手たちは道路ですべてのトラックを検問し、市外からの運転手を追い返した。トレーラーを引つくり返して主要道路を封鎖し、ニューヨーク・タイムズ紙が『数日間ゲリラ戦争を開戦した』と表現したような警察との全面戦争を開戦した」(九頁)。

図表1 ストライキ件数と参加者数、1945-2010



出典: Moody 2007, 労働省労働統計局 2011

公務員労働者も例外ではなかつた。一九六六年に、ある労働研究者は、教員はストライキをする傾向が強いので「労働組合戦闘性の前衛」であると述べている。「ストライキは違法であるが、教員たちはストライキに訴え、実益を勝ち取つてゐる」とも語つてゐる(九頁)。米国史上最大の山猫ストライキは一九七〇年の郵政山猫ストライキだつたが、これも公務員によるストライキであり、連邦法に違反して行なわれ、州兵により鎮圧された。一一〇万人が参加した(二一頁)。この郵政ストライキの後には一九七一年のトラック運転手の全国山猫ストライキが続いたが、これはあまりに戦闘的なため、「オ

ハイオ州知事は州の主要道路に対するこの『公然とした戦争』と戦うために四一〇〇人の州兵を招集した』。このストライキは政治的ストライキで、ニクソン大統領の賃金凍結政策に反対するものだつた。これらのストライキは「経済的力を試している」だけではなく、「新しい形態の抗議」でもあつた(二頁)。

また単にストライキだけではなかつた。労働者たちはスローダウン、サボタージュ、作業停止など広い範囲の争議行為を発明、あるいは再発明した。ワインスローが強調しているように、これらの行為は「職場の大切さと職場支配のための闘い」の重要性を労働者に自覚させた。協約批准拒否は増加し、無数の苦情申し立てが提出され、組合内改革運動が拡大して、既存の組合指導部に対する大きな挑戦となつていった(事例研究では全米鉱山労組、全米自動車労組、チームスターズ労組の重要な事例を挙げてゐるが、建設業の労働者も山猫争議行為の傾向が強かつた。カーペンター労組や国際電気工労組(IEW)についての章が追加されると良いかもしねれない)。

このような反抗は労働者の戦闘性の高まりと組合指導部の保守性と官僚的惰性の現れであつた。組合指導部は労働者の「ガス抜き」のため、あるいは自分たちの政治的な支配への批判を未然に防ぐ意図を持つてストライキを打つことが多くなつたが、労働者を満足させるだけの強い行動を取ることができなかつた、あるいは

ハイオ州知事は州の主要道路に対するこの『公然とした戦争』と戦うために四一〇〇人の州兵を招集した』。このストライキは政治的ストライキで、ニクソン大統領の賃金凍結政策に反対するものだつた。これらのストライキは「経済的力を試している」だけではなく、「新しい形態の抗議」でもあつた(二頁)。

また単にストライキだけではなかつた。労働者たちはスローダウン、サボタージュ、作業停止など広い範囲の争議行為を発明、あるいは再発明した。ワインスローが強調しているように、これらの行為は「職場の大切さと職場支配のための闘い」の重要性を労働者に自覚させた。協約批准拒否は増加し、無数の苦情申し立てが提出され、組合内改革運動が拡大して、既存の組合指導部に対する大きな挑戦となつていった(事例研究では全米鉱山労組、全米自動車労組、チームスターズ労組の重要な事例を挙げてゐるが、建設業の労働者も山猫争議行為の傾向が強かつた。カーペンター労組や国際電気工労組(IEW)についての章が追加されると良いかもしねれない)。

長い七〇年代のストライキの波のもう一つの特徴はこの時代の広範な国際的な抗議の波の一部だつた点である。六〇年代初めにマルコムXが語つたように、「われわれは革命の時代、……抑圧者に対する被抑圧者の世界的な反抗の時代に生きてゐる」。職場では社会運動の担い手であった若者、ベトナム戦争帰還兵、黒人、女性などが増え、「外からの」政治的関心が職場に持ち込まれた。世代間の違いも大きな役割を果たし、反共主義が盛りの時代に育つた組合指導部は反戦世代で声を上げる意欲に満ちた若い世代と対決してゐた。ワインスローによればアメリカ教員連盟(AFT)の指導部の戦争支持姿勢が同労組が組合員を全国教員連盟(NEA)に取られた主要な原因だつた。

弾圧もまた職場内外の闘いを結びつけた。ストライキを鎮圧するために使われた州兵が黒人地域社会の反乱を鎮圧するために主要都市に送られた。トラック運転手の山猫ストライキの鎮圧に使われた同じ部隊が数ヵ月後にはケント州立大学の学生抗議の鎮圧に派遣され、四人の学生の悪名高い射殺事件が引き起こされた。恣意的な権力行使と非人間的行為への抵抗の感情が様々な運動により共有化されていた（四頁）。労働者の間でも同じ傾向が見られた。ウインスローは一例として鉄鋼トラック運転手友愛協会（FASH）のスポーツバーソンであつたポール・ディーチ（Paul Dietrich）の発言を取り上げている。彼は鉄鋼トラック運転手のことを行なう「労働者階級のブラック・パンサー党」（五頁）だと呼んでいる。

ウインスローによればヨーロッパでは七〇年代は労働組合の一〇年と呼ばれていたが、米国では一般組合員の一〇年と呼ばれるべきである。なぜなら、労働者たちは繰り返し、「内に備わった力、組織化する能力、真に『参加型』の民主主義を運動の中で發揮する力を示し、その時代の受身で、形式的な金錢民主主義との対比を示した」からである（九頁）。

このような一般組合員の活動のすべてが『反抗する一般組合員』の執筆者であるフランク・バーダック（Frank Bandacke）、ダン・ラ・ボット（Dan La Botz）、キム・ムーディー（Kim Moody）、スティーブ・アーリー（Steve Early）

が様々な運動により共有化されていた（四頁）。労働者の間でも同じ傾向が見られた。ウインスローは一例として鉄鋼トラック運転手友愛協会（FASH）のスポーツバーソンであつたポール・ディーチ（Paul Dietrich）の発言を取り上げている。彼は鉄鋼トラック運転手のことを行なう「労働者階級のブラック・パンサー党」（五頁）だと呼んでいる。

ウインスローによればヨーロッパでは七〇年代は労働組合の一〇年と呼ばれていたが、米国では一般組合員の一〇年と呼ばれるべきである。なぜなら、労働者たちは繰り返し、「内に備わった力、組織化する能力、真に『参加型』の民主主義を運動の中で發揮する力を示し、その時代の受身で、形式的な金錢民主主義との対比を示した」からである（九頁）。

のような急進的学生の一世代を駆り立て労働者が階級に向かわせ、彼らは工場労働者となり組合オルグや活動家となつていった。民主主義社会争としての労働運動」のイデオロギーを奉じるこれら活動家にとって戦闘性の大高揚はその理論にふさわしい労働者革命を現実に実現する好機を提供しているように思えた。

一般組合員の一〇年は新しい大統領ロナルド・レーガンが航空管制官のストライキを破壊したPATCOの大敗北まで続いた。「この一〇年代の最後まで一般組合員の組織の創立などの重要な闘いが続いた」（七頁）。大高揚が突然衰退したのはウインスローによれば、「米国資本の剥き出しの力」や労働組合の根強い官僚主義のせいだけではない。一般組合員の運動が貫いた指導部を作ることができず、産業や人種を超えて労働者を団結させる組織形態を欠いており、何よりも民主主義を実現し利潤の追求に替わり人間的欲求の充足を可能とするもう一つの世界像を描くことができなかつたことが理由である（アリ・ポールも同様の主張をしている）。

いるものについて書いている。クルーグマンについて一九七九年は単なる指標ではなく、政治的議論の一部である。彼によれば、戦後から七〇年代までは一種の黄金時代であった。ニューヨーク・タイムズ紙のブログ「リベラリストの良心」のなかで彼はこう語っている。「私の青年時代の政治・経済環境は今となつては失われた樂園、米国の歴史の中の例外的な時代のよう

に思える。中流階級のアメリカ、極端な金持も貧困もない社会、反映が広く共有化される社会、強い労働組合と高い最低賃金と進歩的な税制度が不平等を制限していた」(Krugman 2011 参照)。クルーグマンのこの主張は「〇七年九月一八日付の彼の最初のブログに掲載されたこの図表に示されている。

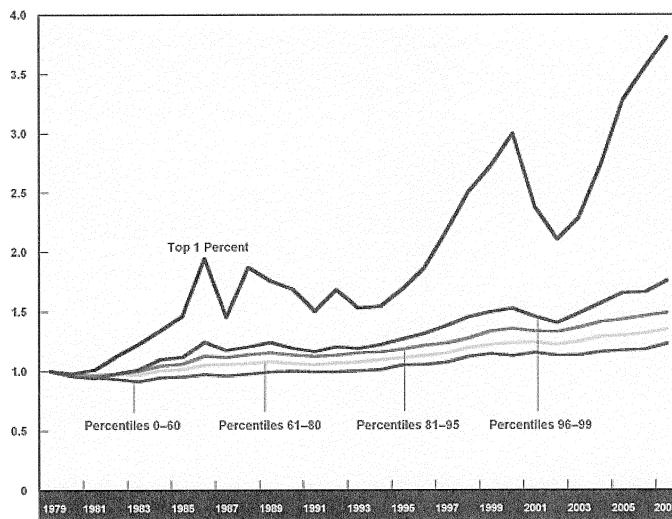
この図表3はアメリカ国民の中の豊かな上

位一〇パーセントの収入が全体に占める割合を過去九〇年間に亘って示しており、経済的不平等を表す他の数字と同じような推移をしている(この図表は経済学者トマス・ピケティ(Thomas Piketty)とエマニュエル・サエズ(Emmanuel Saez)の推計にクルーグマンが時代説明を足したものである)。

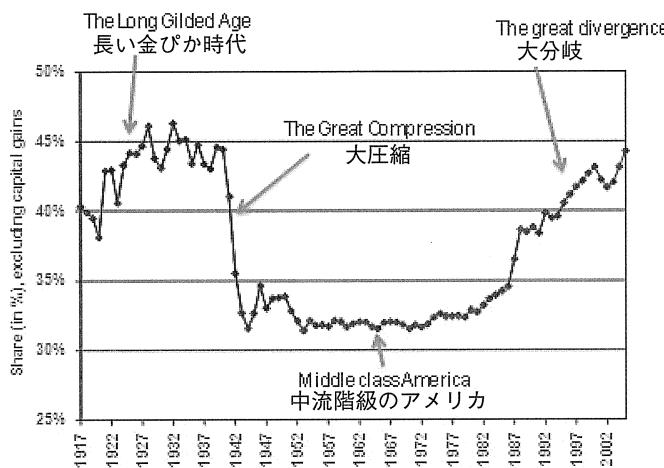
ウォール街占拠運動の参加者のすべてがクルーグマンの持つ「中流階級のアメリカ」への郷愁あるいはリベラルな政治傾向を抱いているわけではないが、「われわれは九九パーセントである」というスローガンはこの見方と合致しているよう見える。上位一パーセントとその他の人のとの格差が問題だとすると、その解決は格差を縮小することではないか。そうなら格差がこんなに極端ではなかつた時代に戻ろうではないか。ウォール街占拠運動を取り込もうとする試みは、リベラルな政治戦略が正しく、その戦略のための手段はまだ民主党であると、参加者や支持者を説得できるかどうかに掛かっている。

『反抗する一般組合員』の編者や執筆者たちも七〇年代に対しても多少郷愁を抱いているが、その理由は異なっている。彼らの描く七〇年代の姿はクルーグマンの「古き良き時代」とはまったく違っている。それは危機の時代であり、職場、地域、ホワイトハウス、企業の役員室、労働組合会館など社会のあらゆる場所で政治経済の地殻変動を感じ取られ、受け入れがた

図表2



図表3



い生活様式が捨て去られた時代であった。この爆發を引き起したのは不満と怒りを抱く、自信を深めた組織された労働者階級であり、解放と平等を求める社会運動と密接につながっていった。闘の時代であり、それゆえに希望の時代でもあつた。

本書評の第一部はこの時代の政治経済をくわしく検討し、自由主義経済政策のつかの間の勝利と本質的な失敗を取り上げ、ビジネス・ヒューリックと一般組合員の反抗の両方の高まりを分析する。

第三部は農業、鉱山、教育、家内労働など的一般組合員の反乱の事例研究を取り上げる。『反抗する一般組合員』はいれかやの六〇年代七〇年代の歴史のなかで語られ、評価されていなかった下からの歴史を提供しており、そのなかでもこれらの事例研究は一番価値がある部分である。本書は現代の労働者運動の活動家に教訓と課題を提供するものとなつてゐる。結論としては、ウォール街占拠運動が今日の労働者運動に何を教えてくるかと云ふ間に、この歴史からの教訓と課題を適用して応えた。

(△△△)

- Clawson, Dan. *The Next Upsurge*. Ithaca: Cornell University Press, 2003
- Downs, Steve. "Solidarity 2009 Northeast Regional Conference." *Dailymotion*. 11/20/2009. SolidarityUS.

Accessed 12/12/2011. [http://www.dailymotion.com/video/xbjpx\\_stevie-downs-solidarity-2009-northeast-regional-conference\\_news](http://www.dailymotion.com/video/xbjpx_stevie-downs-solidarity-2009-northeast-regional-conference_news)

- Greenwald, Glenn. "Here's What Attempted Co-optation of OWS Looks Like." *OpEdNews*.com. 11/19/2011. Accessed 12/12/2011 <http://www.opednews.com/articles/Here-s-What-Attempted-Co-O-by-Glenn-Greenwald-111119-488.html?show=votes>

• Krugman, Paul. "Introducing this Blog." *The Conscience of a Liberal*. New York Times. 9/18/2007. Accessed 12/12/2011 <http://krugman.blogs.nytimes.com/2007/09/09/introducing-this-blog/>

- Noyes, Matt. "Matters of Human Debate: Using the Internet for Union Democracy," *The CyberUnion Handbook*. Shostak, Art, ed. New York: M.E. Sharpe. 2002

(△) 110-11年末にはウォール街占拠運動の活動家たちが住宅立ち退きを阻止し、抵当流れとなつた住宅を取り戻す闘に取り組むよへじなつた。  
(△) マトリ・ケイ・クハローの声明 <http://www.seiu.org/2011/11/endorsement-2012.php>

(4) この闘は激しい選挙戦に移り、組合の支持者たちは知事をリコールして反組合立法が他の州に広がるのを阻止しようとしている。労働組合の再生の徵候は他にもあることは指摘する価値がある。たとえば、五月一日に行なわれたウォール街に対するデモは、九月のウォール街占拠運動と外見上よく似ていた。 <http://labornotes.org/2011/05/payback-time-activists-shine-light-soulmate/>

(△) 伝統的な用語は時代はやれにならへど、

"Labor" (労働陣営) はかつては "Big Labor" (偉

大な労働陣営) だったが、労働者セントーラムの

もうじ職場と地域と両方で労働者を組織する組織  
とは別ではあるな。 "Labor Movement" (労働運動) も同様である。この書語では希望的な代替と言ふ "workers movement" (労働者運動) を使用する。まだ存在してゐなが、運動に必要な幅を表現してゐるかがだ。

(6) 一例として、トラック産業でチームスターズ労組が勝ち取った全国労働基準はこの二〇〇年で低下してしまった。

(7) アーロン・ブレナーの指摘によればブルーカラー労働者は保守的で愛国的だという当時の一般的なイメージに反して、「ホワイトカラーの専門職と同じようにブルーカラーワーク者たちの間でも反戦感情は高かつた。」(xiii頁)。

(8) "Class Struggle Unionism" 「階級闘争としての労働運動」は International Socialist の創設者ジャック・ワインバーグ (Jack Weinberg) が一九七四年に書いた影響力の大きかったペソフの題名である (Weinberg 1974 参照)。

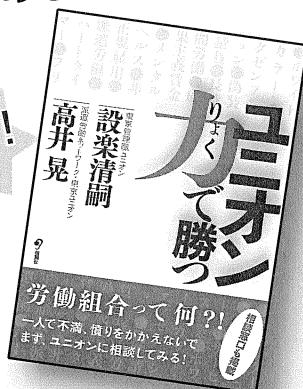
(9) 二〇一一年九月四日付けニューヨーク・タイムズ紙に掲載されたこの便利な図表も参照: <http://www.nytimes.com/imagepages/2011/09/04/opinion/04reich-graphic.html?ref=sunday>

Matt Noyes  
マットノイエス セイヒチ

## 一人で不満、憤りをかかえないで! ユニオン(労働組合)がある!

働く者たちを襲う困難。  
これまでの問題を解決してきた  
経験豊富な一人が、  
現状を突破する闇い方を伝授!

好評発売中!



労働組合 (したら・きよつく)

東京管理職ユニオン

高井 晃 (たかい・あきら)

NPO派遣労働ネットワーク、東京ユニオン

<http://www.junposha.com>

# ユニオン 労働で勝つ

定価 1,575 円 (税込)  
四六判 / 176 ページ  
ISBN 978-4-8451-1020-9

旬報社

〒112-0015 東京都文京区自白台2-14-13  
Tel: 03-3943-9911 Fax: 03-3943-8396